

## 「共に歩んだ左耳」

「史ちゃんの前向きさで、私もショックから立ち直れたよ。ありがとう。」

様々な人からかけていたただく、この言葉が、私を成長させてくれます。

私は、先天性の一側性難聴により、左耳の聴力がありません。一側性難聴とは、名前の通り、左右どちらかの耳がきこえない状態を指します。片方の耳は正常にきこえているために、言語発達の遅れやコミュニケーションの困難がほとんど見られず、外見からは理解されづらい障害の一つです。実際に私も、難聴である左側から話かけられて、それに気付かずは無視をしてしまったり、遠くから名前を呼ばれた時にどこから声がしているのか判別できなかったり、そのたびに相手の反応

を見るのが怖いことがあります。しかし、「言わなければ伝わらないことがある」、「自分のこと、一側性難聴のことをもっと知ってもらいたい」との思いから、自分のためにも周囲のためにも、難聴のことを必要に応じて伝えることの大切さ、そして、伝えることで得られる理解や共感があることを経験してきました。その、周囲の理解が、これまで学業や部活動に対して前向きに取り組むことができた原動力であったと、感じています。

高校二年生の時、おたふく風邪によって一側性難聴を患った方と出会いました。片耳がきこえないというハンディを持ちながらも、学業やスポーツ、人間関係、すべてにおいて前向きな私の姿を見て、先述の「立ち直れた。ありがとう。」という言葉をかけていただきました。力になれたことがとても嬉しかったと同時に、一側性難聴を持って生まれてきた

者だからこそ、様々な場面で「きこえにくい」を経験してきた当事者だからこそ、できることがあるのではないか。そして、それを行動に移していくことが私の使命なのではないか。強く、そう思うようになりました。


それから三年。はたちになった今、私は愛媛大学教育学部特別支援教育教員養成課程にて、聴覚障害児教育について専門的に勉強しています。

一側性難聴者として、同じ障害をもつ方とのコミュニケーションの機会をもつほか、聾学校を参観したり、ボランティア活動に参加したりして、聴覚障害児との関わりも積極的に行っています。その中でも、難聴に対する捉え方が個々人で異なるため、前向きだけではいられず、悩むこともあります。そして、難聴の程度によって、コミュニケーション手段の獲得の方法や、教育の場を適切に選択し、

ニーズに応じた支援を提供することが、きこえにくい子どもが「きこえないなりに」学力を身に付け、自分の道を自分で切り拓くことができるようにするために、必要なことだと実感しています。

きこえにくい子どもは、学校、学級、そしてあなたのすぐ近くにいます。自分自身の「きこえにくい」経験を通しての適切な支援の提供や、自分の何事にも真っすぐな前向きさで、きこえにくい子ども、その親御さんの気持ちに、教育相談などを通して、さらに寄り添うことができるように、障害児教育について懸命に学び、ここ徳島で教員となり、子どもたち一人ひとりが抱えるニーズと向き合い、支援していきます。

最後に、将来の夢やたくさんの人たち、良い経験、苦い経験、そのすべてに出会わせてくれた、二十年間共に歩んできた、私のきこ



えない左耳。「きこえない」からこそ、感謝  
の音が詰まっています。本当にありがとう。